

## I 訪問研究員の招聘

極東地域研究センターでは、2月上旬に初めての試みとして海外の研究者を短期間招聘しました（担当：馬駿）。第1回目の招聘は、ロンドン大学 SOAS (School of Oriental and African Studies: 東洋アフリカ学院) から、ファイナンスを専門とする Dr. Hong Bo 女史でした。ロンドン大学 SOAS はアジア・アフリカ地域を対象とした地域研究を行う組織として世界的に著名な大学です。

Hong Bo 博士は、SOAS 内の経営系の学部にも所属しており、主に中国の経済・ファイナンスを対象とした研究を行っています。その研究成果は、*European Journal of Finance* や *Journal of Banking and Finance*、*Economica* といった一流学術誌に多数掲載されています。

経済学部との協力の下、Hong Bo 博士には、学部での Risk Management の講義（3日間で1単位の集中講義）を英語で行っていただきました。経済学部では、来年度から一部で英語による講義を導入する予定であり、そのための良い訓練になったのではないのでしょうか。



写真 1. Hong Bo 女史によるセミナー

## 参加学生のコメントから（経済学部：堤谷友賀さん）

これまで大学の授業で、専門科目の授業を英語で受けるということは経験したことがありませんでした。私は不安でしたが、教授がものすごく丁寧に英語で分かりやすく説明してくださりました。内容についても、これまで大学で学んできたこととリンクすることが多々あり、興味深い内容でした。私は富山で留学にでも行っているような感覚で授業を受けることができずごく新鮮だったと共に、自分の英語力の低さを実感しました。しかし、現段階で自分の持っている英語力については自信を持つことができました。リスクマネジメントの集中講義を受けて本当に良かったです。

また、研究者向けには Hong Bo 博士の直近の研究成果についてのセミナー報告を行っていただきました。タイトルは、Board Attributes and

Herding in Corporate Investment: Evidence from Chinese Listed Firms で、中国企業による投資の経営判断に「群衆行動」が見られるかどうかに関する実証的分析でした。

極東地域研究センターでは、来年度以降も同様の招聘を実施し、長期的視点に立って、世界各国の研究・教育機関との実質的なネットワークの強化をはかっていきたいと考えています。

（文責：馬駿・山本雅資）

## II メルボルン便り

2013年10月より1年間の予定でオーストラリアの第2の都市であるメルボルンで研究活動を行っています。La Trobe 大学の経済学部にお世話になってから4カ月になりますが、その間に感じたいくつかを紹介します。まず、メイン・キャンパスは市中心部からは少し離れていますが（自動車ですら約30分程度の距離）、緑豊かで敷地内で野生動物の保護区域があるほど広く、敷地を散歩するとカンガルーとも遭遇できます。また、教員や学生においても多くの国・地域から集まっています。オーストラリアが多くの移民を受け入れた歴史的な経緯もあって移民の人が多くいますが、学生に目を向けると留学生も多く、その中でも中国人の学生が最も多いのは日本と同じです。教員も外国籍の人が多く、やはり中国やインドなどアジア系の教員が多いですが、日本人も在籍（2人）しています。



写真 2. La Trobe 大学の図書館にて

最も印象深かったのは充実した図書館です。本の貸し借りのシステムはそれほど変わらないですが、図書館の内部が徹底的に学生の立場を考慮した構造になっていると感じました。まず、ほとんどの席にデスクトップ・コンピューターが設置されており、小グループの学生が一緒に討論しながら勉強できるように大型モニターが設置された多様な大きさの部屋（スタディー・ブース）が多く

設けられています。また、1階と2階ではある程度話しもできる自由な雰囲気になっていますが、3階では一切私語が禁止され勉強に集中できるようになっています。大学院生用の部屋も別に設けられています。4～5人のグループの学生が自由に議論しながら勉強している姿を見ると、授業の時にも多くの質問が出るなど積極的に授業に参加する姿はこのような恵まれた環境の延長線にあると感じました。(文責：金 奉吉)

### III 「知られざる極東ロシアの自然と森林」シンポジウムの開催

2014年2月27日、富山県民会館304号会議室にて、極東地域研究センター主催(環日本海学術ネットワーク特定テーマ支援事業)のシンポジウムが開催されました。参加者は、一般の富山県民や富山県内の研究機関研究者等、38名でした。アムール州北部のゼーヤ川上流域を中心とした自然と林業について、ロシアの研究者3名とセンターの教員1名、合計4名の発表者から話題提供や研究紹介があり、発表は逐次通訳されました。



写真3. シンポジウムの講演者と通訳者との記念

ゼイスキー自然保護区管理所・元研究員のロマノバ・エレナ先生は「ゼイスキー自然保護区に見られる森林植物」について講演し、エゾマツ原生林の特徴や貴重な野生植物等についてお話下さいました。同管理所・管理官のリソフスキー・ピクター先生は「ゼーヤ地域とアムール州における林業」について講演し、日本ではあまり知られていない当地域の伐採方法や森林施行法についてお話下さいました。ロシア科学アカデミー極東支部地質学・自然管理研究所・研究員のブリャーニン・セミョン先生は「アムール州の森林土壌」について発表し、土壌の理化学性やその特徴について解説されました。極東地域研究センターの和田直也は「ゼーヤの山に生きるハイマツの生態」につい

て発表し、高山帯と森林帯におけるハイマツの形態変異から本種の環境適応を論じました。

極東ロシアの山岳地には、博物学的な興味を掻立てる原生的な自然と、資源として利用可能な広大な森林が存在しています。自然と人間のよりよい関係を永く保つためにも、山岳地を対象とした基礎研究の重要性が再確認できたシンポジウムでした。(文責：和田)

### IV 地域研究四方山話 (11)

1868年ロンドン市内に世界初の灯火式交通信号が設定され、色は緑と赤の2色のみだったそうである。日本では遅れること62年、1930年に東京に設置されている。しばしば現地観測のため訪れるロシアのヤクーツクにも信号は当然あるが、よくよくみるといくつか違いがあった。

日本では横型が主流で、積雪地域では縦型が多くなっている。酷寒地のヤクーツクでも縦型であった。この縦型は、世界的に主流のようである。面白かった大きな違いは、信号機の点灯パターンである。「進んでOK」の緑→黄→赤の時に、黄の前の緑が3回ほど点滅するという違いもあるが、特に「進んではいけない」から「進んでOK」の点灯パターンに大きな違いがあった。日本では、赤で停止していると緑へ、いきなり変わる。



写真4 赤から緑への発車準備。フライングは御法度。

ただし交差する道路の信号をみて、頃合いを見計らうことは可能である。ヤクーツクでは、赤→緑の「進んでOK」の時に、赤を点灯させつつ一旦、黄も同時に点灯させて(写真1)、そして緑のみとなる。これにより、早くスタートダッシュを切ることができる?!調べてみると、ヨーロッパなどで一部使われているようである。

(文責：杉浦)